

第54回新潟大腸肛門病研究会

日時 平成16年12月11日(土)
午後3時～5時35分
会場 新潟グランドホテル
5階 常磐の間

I. 一般演題

1 続発性アミロイドーシスとサイトメガロウィルス感染を合併したNSAIDs起因性腸炎の1例

須田 和敬・須田 武保・高久 秀哉
牧野 成人・本間 英之・大竹 雅広
味岡 洋一*

日本歯科大学新潟歯学部外科
新潟大学大学院分子・病態病理学分野*

症例は87歳,女性.

【家族歴】特記事項なし.

【既往歴】慢性関節リウマチの疼痛に対しNSAIDs製剤を使用.

【現病歴】下血・腹満を主訴に当院内科緊急入院. CT上多量のフリーエアを認め,消化管穿孔による汎発性腹膜炎の診断で当科転科し緊急手術施行.術中所見では結腸,直腸に5カ所の穿孔を認め,左半結腸切除,人工肛門造設術を施行した.病理学的検索では続発性アミロイドーシスとサイトメガロウィルス感染を合併したNSAIDs起因性腸炎が最も疑われた.

NSAIDs長期使用例では,本症例の様な病態を常に念頭に置く必要があると思われた.

2 腸重積をきたし肛門外に脱出したS状結腸癌の1例

清水 大喜・外山 美沙・小海 秀央
矢島 和人・桑原 明史・谷 達夫
飯合 恒夫・岡本 春彦・畠山 勝義
新潟大学大学院消化器・一般外科学分野

3 当科における直腸脱に対する術式選択

野上 仁・松尾 仁之・小林 孝
新潟臨港総合病院外科

【はじめに】当科における直腸脱の治療成績と手術術式の選択を紹介する.

【対象】2000年から2004年までの5年間に当科で直腸脱手術を受けた22例(男性7人,女性15人).

【結果】手術回数は全部で25回.平均年齢は73.12歳.観察期間は14.04ヶ月.術式はGant-三輪, Thiershe法が15回, Delorme法が5回, Altemeier法が2回. Wells法が3回. Gant-三輪, Thiershe法の再発は15例中6例, 40%. そのうち再手術を受けたのは3例, 20%であった. Delorme法, Altemeier法, Wells法では再発を認めなかった.

【術式選択】当科では初発例にはDelorme法, 再発例にはWells法を基本方針としている. 脱出長が長く, 腫大の強いものにはAltemeier法を, 全身状態不良例にはGant-三輪, Thiershe法を選択している.

4 下部進行直腸癌に対する側方郭清の功罪について

丸山 聡・瀧井 康公・藪崎 裕
土屋 嘉昭・佐藤 信昭・梨本 篤
田中 乙雄・佐野 宗明

県立がんセンター新潟病院外科

1990年から2001年までに根治手術がなされたRb, Pの進行直腸癌(Dukes B, C)127例を対象とし, 側方郭清施行91例と非施行36例の周術期問題点と遠隔成績を比較検討した.

【結果】背景因子として側方郭清施行群は非施行群と比べて年齢が若く, 腫瘍径が大きく, リンパ節転移が高度であるという有意な偏りがあった. 手術時間は郭清群で有意に長かった. 術後合併症は郭清群で有意に多く認めた. 5年生存率(5YDRS)は郭清群73.8%, 非郭清群65.7%で, 有意差はなかった. Dukes Bの5YDRSは郭清群96.9%, 非郭清群77.1%で, 郭清群で良好であっ

た ($p = 0.063$). Dukes C の 5YDRS は差がなかった。

【結語】側方郭清は手術時間が長く、術後合併症が多い。遠隔成績で明らかな有効性は認められなかったが、Dukes B 症例で郭清効果が期待できる可能性がある。

5 潰瘍性大腸炎に対する LCAP と GCAP の治療効果の比較検討

渡辺 和彦・池田 晴夫・岩本 靖彦
相場 恒男・米山 靖・古川 浩一
和栗 暢生・五十嵐健太郎・月岡 恵
新潟市民病院消化器科

2002 年 7 月から 2004 年 11 月までに当科で施行された LCAP, GCAP を対象に, CAI 値の推移による治療効果, 有効性を検討した。患者数は 18 例, 11 例 (計 14 回) が LCAP, 7 例 (計 7 回) が GCAP を施行された。結果は LCAP 14 回中 11 回で効果を認め (78.6%), GCAP 7 回中 3 回で効果を認めた (42.9%)。若干 LCAP が有効な印象であった。LCAP では開始約 2 週後, GCAP では約 3 週後に効果が認められる傾向であった。中等症に限ると両者とも効果が期待でき, 重症や下掘れ潰瘍合併例では効果はやや乏しかった。再燃した症例は, 両者とも 8 ヶ月以内に再燃した。緩解維持目的のアザチオプリンを併用しない群では全例再燃した。更なる症例の蓄積と長期の経過観察が両者の比較検討には必要である。

6 難治性潰瘍性大腸炎に対するタクロリムス使用の試み

津端 俊介・杉村 一仁・本間 照
小林 正明・田崎 麻子・成澤林太郎
青柳 豊
新潟大学医歯学総合病院第三内科

ステロイド抵抗性の難治性潰瘍性大腸炎患者 4 名の緩解導入・緩解維持治療に, タクロリムスを用いる機会があったので報告する。

いずれの症例も頻回の再燃を示し, ステロイ

ド・LCAP に対する治療反応性が低下していた。寛解導入目的に用いた時, 3 例で有効であったが, 効果発現までに少なくとも 1 週間を要した。随伴症状としては, 手指・指の振戦を 3 例に, 耐糖能異常を 2 例に, 尿蛋白を 1 例に認めた。感染症の発症や増悪は認めなかった。一方, 寛解維持目的に用いたとき, 投与量の減量に伴って再燃した症例を経験した。このことは, 緩解維持に対するタクロリムスの有効性を示唆するものと考えた。以上より, タクロリムスは今後の難治性潰瘍性大腸炎の緩解導入・維持療法に対し, 有効な薬剤である可能性が示唆された。今後の課題として, 症例の選択や, 再燃防止のための投与期間, 癌や催奇形性などの問題に関して, 症例を積み重ねる必要があると考えた。

7 炎症性腸疾患に対する 6-MP の有効性について

石本 結子・本間 照・松澤 純*
杉村 一仁・小林 正明・佐藤 俊大
小林久里子・五十川正人・窪田 智之
青柳 豊
新潟大学医歯学総合病院第三内科
県立坂町病院*

8 クロウン病に対するレミケード治療の経験

月岡 恵・池田 晴夫・岩本 靖彦
渡辺 和彦・相場 恒男・米山 靖
古川 浩一・和栗 暢生・五十嵐健太郎
新潟市民病院消化器科

炎症性サイトカイン TNF α に対するモノクローナル抗体, infliximab (商品名レミケード) の使用経験について報告した。炎症性クローンに対する単回投与 (4 例 7 回) では, 1 週後に炎症の著明な改善を認めたが, 8 ~ 12 週後には投与前のレベルまで増悪した。8 週間隔の維持療法を行った 2 例では, 1 例が投与 3 回目頃から CRP のコントロールをみたが, 1 例は無効であった。クローン病の胃・食道病変に対して投与した例では, 8